

手紙の前で、ミレナの手前で

In front of the letter, in front of Milena

『ミレナへの手紙』をどのように読むか

『ミレナへの手紙』読書会@2023年3月25日（土）に合わせて私的に制作・配布された資料ですが、ラブレター茶話会での議論の叩き台に活用できそうなので一部を公開します。
記載内容は個人の読書経験に基づくアイデアをベースとしており、内容の正確性・正当性は保証しません。

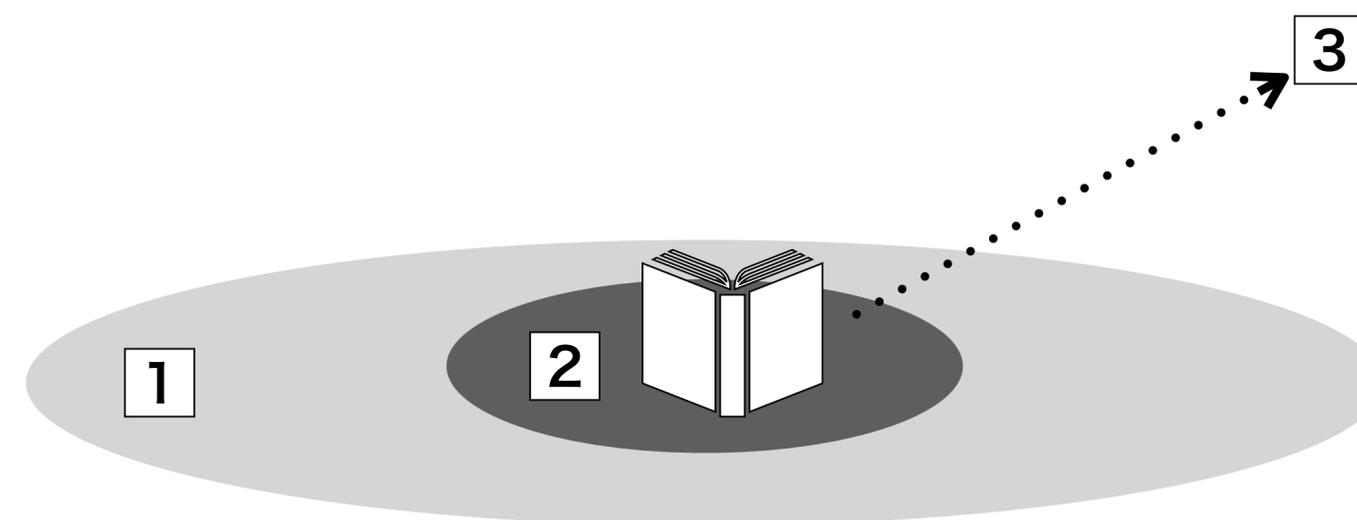
目次・凡例

目次

1. 書物の網を見渡す——誤配された手紙を適切に取り扱うために
 - (1) 倫理的課題
 - (2) 人文学と固有名
 - (3) 作家論の展開
 - (4) コミュニケーションの技術史
 - (5) 亡霊はどこからきて、何を企むか
2. 手紙に呼びかけられる不安——書かれた私と書く私についての考察
 - (1) テキストにとどまるための錨
 - (2) 手紙のはざままで
 - (3) 現実的、あまりに現実的
 - (4) 二重の生をさまよう
 - (5) 面を見る、面に触れる ← 抜粋箇所
 - (6) 書くことの生
3. 限りなく透明をめざす世界——余白のありかをめぐって
 - (1) 『ミレナへの手紙』のあとで
 - (2) 愛のゆくえ
 - (3) 来るべき実践に備えて

凡例

- ◆ スライド内引用文について、フランツ・カフカ『ミレナへの手紙』（池内紀訳、白水社、2013年）引用箇所は「BoM 引用頁」と記している。
- ◆ 同書の引用について、訳文の平易さを鑑みて一部フランツ・カフカ『ミレナへの手紙 決定版カフカ全集8』（辻理訳、新潮社、1981年）からの引用としている。該当箇所はスライド内に注記あり。
- ◆ 同書引用箇所について、引用文の下線は引用者による。
- ◆ 同書引用箇所について、原文の傍点や原注「[チェコ語]」の指示は省略した。



2-5 面を見る、面に触れる

■ カフカと窓

作家は作品によって誕生する。それ以前には、その作品を書く者は誰もいなかったのであり、書物が存在してはじめて、自身の書物と融合する作家が生まれたのだ。カフカは、「彼は窓から眺めていた」と何気なく書いた時、自分は、その文章がすでに完全であるような一種の靈感の中にいた、と語っている。それは、彼がその文章の作者であり、さらに正確に言えば、その文章が彼を作るのであり、彼自身であるとともに、彼が文章そのものでもあるのだ。

——モーリス・ブランショ 『カフカからカフカへ』

*モーリス・ブランショ 『カフカからカフカへ』 (山邑久仁子訳、書肆心水、2013年)

2-5 面を見る、面に触れる

■ カフカと窓

そのときは、これがきみの手にする最後の手紙になり、あとは顔を見合わせるだけ。ひと月このかた用のなかった目、（たしかに手紙を読むのと、窓の外は見やっていたが） その目がきみを見ることになる。（BoM 188）

◆ 目の用途

- 手紙を読む（／書く） : 能動的＝手と目を同時に動かす
- 窓の外を見る : 受動的＝見ているだけ

2-5 面を見る、面に触れる

■ カフカと窓

いまのところ、悩みなんてほんのささいなこと。たとえば仕事場で、ほとんど仕事が手につかないといったこと。きみに便りを書かないときは、背もたれ椅子に座って窓の外をながめている。正面は低い二階屋だから、よく見える。外を見ていると気がめいってくるなんてことはない。そんなことはない。ただついぼんやりとしてしまうのだ。 (BoM 135)

◆ 手紙を書く (／読む)

能動的 = 手と目を動かす = 主体と記号が働きかけあう = 不安

◆ 窓の外を見る

受動的 = 見ているだけ = イメージから訴えかけられる = 安穩

2-5 面を見る、面に触れる

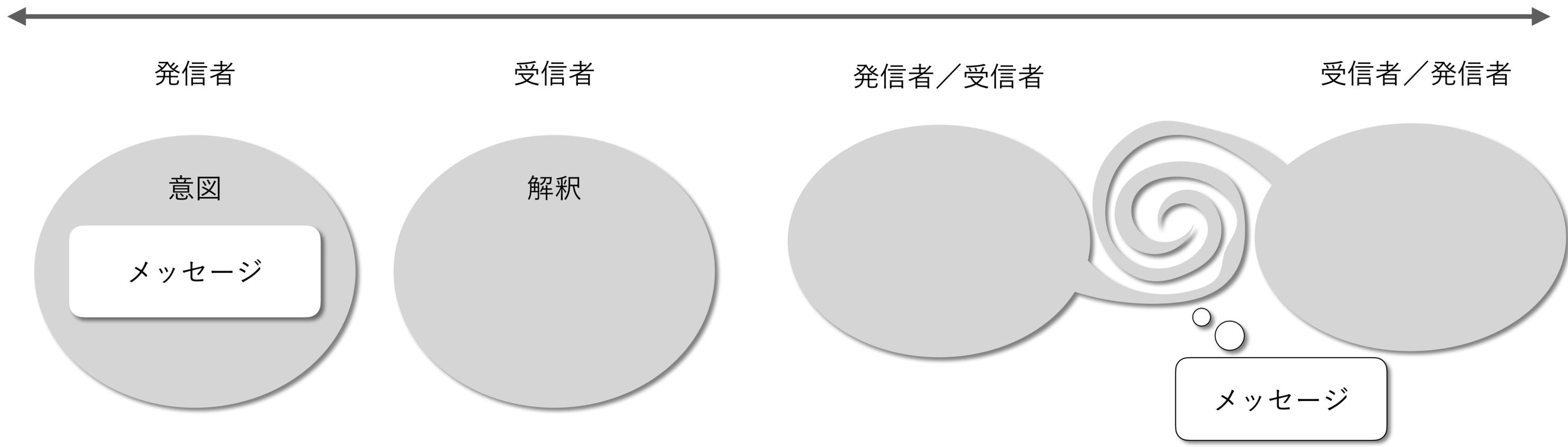
■ コミュニケーションの伝達モードと生成モード

伝達モード

- メッセージは発信者の中にある
- 一方的
- 役割分担が明瞭

生成モード

- メッセージがやりとりの中で生まれていく
- 双方向的
- 役割分担が不明瞭



*伊藤亜紗『手の倫理』（講談社、2020年）掲載図から

手紙に呼びかけられる不安 書かれた私と書く私についての考察

2-5 面を見る、面に触れる

■ コミュニケーションの伝達モード

[...] 伝達モードの特徴は、発信者から受信者へという一方向の作用が想定されている、ということです。発信者が、自身の持っているメッセージを、受信者のもとに届ける。受信者が送信者に干渉するという逆方向の作用は、そこで想定されていません。

——伊藤亜紗『手の倫理』

◆ 伝達モード = 指示・命令など

2-5 面を見る、面に触れる

■ コミュニケーションの生成モード

[...] たとえば日常の会話がしばしばそうであるように、自分がAというつもりで伝えたメッセージが相手にとってはBという別の意味を持つ、ということがありえます。[...] つまり、メッセージは必ずしも発信者の中にあらかじめあるわけではないし、発信者から受信者へ一方向に伝わるものではないのです。

——伊藤亜紗『手の倫理』

[...] あらかじめ準備されたメッセージが相手のもとで違う意味を持ってしまうことは、コミュニケーションの失敗ではありません。生成モードにおいては、やりとりの中に生じるそうした「ズレ」こそが、次のコミュニケーションを生み出していく促進要因になるのです。

——伊藤亜紗『手の倫理』

2-5 面を見る、面に触れる

■ 伝達モードとしての窓、生成モードとしての手紙

窓：伝達モード

- 受動的
- ただ見ているだけ（視覚）
- イメージから訴えかけられる



- イメージの受信
- 見る主体とガラス面の同一化
- フレームの規定
(平面に圧縮される奥行き・枠外の無化)

安穩

手紙：生成モード

- 能動的
- 手と目を動かす（触覚）
- 主体と記号が働きかけあう



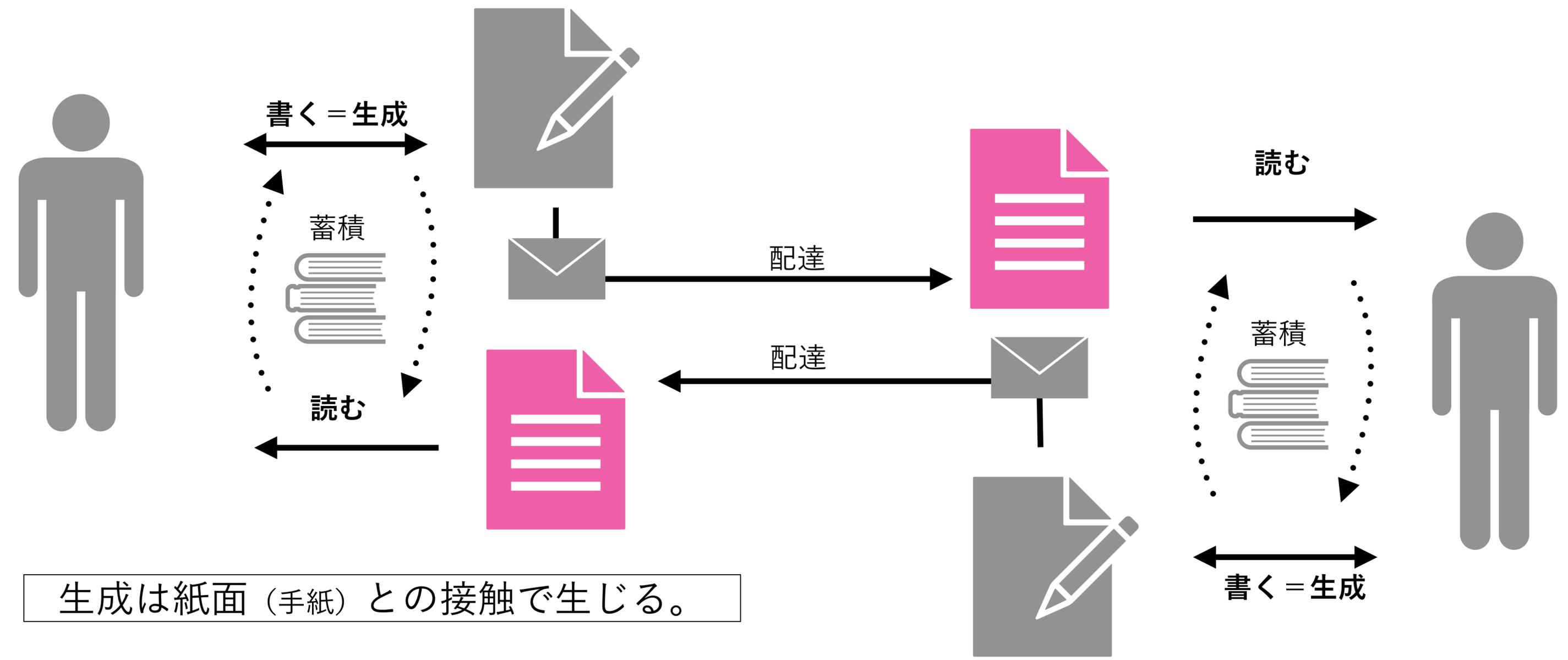
- 意識の生成
- 書く主体と紙面のずれ
- 言葉や紙面の増殖

不安

2-5 面を見る、面に触れる

「第2回ラブレターについて語らう茶話会」では、「書くこと」に主軸を置くグループと「読むこと」に主軸を置くグループに分かれて話し合いを進める予定です。

■ 生成モードとしての手紙 (図)



生成は紙面 (手紙) との接触で生じる。

手紙に呼びかけられる不安 書かれた私と書く私についての考察